

Title	黒沢清フィルモグラフィ(黒沢清・誘惑するシネマ)
Sub Title	
Author	常石, 史子(Tsuneishi, Fumiko)
Publisher	
Publication year	2001
Jtitle	Booklet Vol.8, (2001. ) ,p.86- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000008-04394238">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000008-04394238</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『神田川淫乱戦争』(83年)

脚本：黒沢清／撮影：瓜生敏彦／出演：麻生うさぎ、美野真琴、岸野萌圓、周防正行ほか

母子相姦に淫する母親の手から無垢な少年を救い出すべく、神田川を渡って進撃する二人の女たち。立教大学在学中から8ミリ映画ではすでに知る人ぞ知る存在であった黒沢清の、記念すべき商業映画デビュー作である。ディレクターズ・カンパニーのボス長谷川和彦(『青春の殺人者』等)は、その鷹揚な監督ぶりによって「これなら自分だって監督になれる」と黒沢に自信を与え、実際に映画界に撃って出る途をも与えたのだから、その功績は評価されていい。ストレッチ体操として、あるいはギャグとしてのレズ行為、でんぐり返りながらのセックスによって、ポルノというジャンルと斬り結ぶ地点を模索しながらも、やつつけられるべき母親と救い出されるべき少年とがいかに幸福げに「河は呼んでいる」を重唱してしまったり、少年が奏でる横笛の音が煽情的に響いたりするこの映画は、『ドレミファ娘の血は騒ぐ』とともに黒沢的ミュージカルの目も眩むような達成を示してもいる。

## 『ドレミファ娘の血は騒ぐ』(85年)

脚本：万田邦敏、黒沢清／撮影：瓜生敏彦／出演：洞口依子、伊丹十三、加藤賢崇、暉峻創三ほか

「とうとう来ました、吉岡さん」という極めつけの名台詞とともに、黒沢映画のディーバ、洞口依子が初めて登場する。「吉岡実」(加藤賢崇)率いるバンドの珍妙な演奏が流れるカセットプレーヤーを握りしめて「田舎」から出てきた秋子(洞口)は、大学という未知の世界を探検するうちに「愛」をどこかに置き忘れ、心理学教授の平山(伊丹十三)が追求する「極限的恥ずかし変異」の実験に、その無垢に輝く身体を提供することになる。終始「恥ずかしさ」の側にとどまって「快楽」へと墮ちることのない秋子をかばうように、エミ(麻生うさぎ)がわけもなく健気に裸体をさらし、交情したりもするのだが、やはり「全然いやらしくない」とにつかつ(現・日活)の配給を断られてしまい、草原を移動で撮りたいという生理的欲求のみから生まれ落ちたようなラストの戦争シーンなどを撮り足し、「女子大生・恥ずかしゼミナール」から現タイトルに改題して一般映画として公開された。そよ吹く風に発情するゼミ生たち、恥ずかしさのあまり秋子が股間から発した光線が目覚めるエミなど、あかるく怠惰な官能が唐突に私たちの目を射る。

## 『スウィートホーム』(88年)

製作総指揮：伊丹十三／脚本：黒沢清／撮影：前田米造／出演：宮本信子、山城新吾、NOKKOほか

「伝説の画家・間宮一郎」を追って呪われた廃屋に入り込んだTVクルーが遭遇する恐怖の数々。伊丹十三製作総指揮、宮本信子主演という筋金入りの伊丹プロ作品で、クローズアップやSFXを多用した騒々しい演出を強いる伊丹との確執は、二次使用料をめぐる訴訟にまで発展した。とはいえ今となつては、伊丹の『お葬式』『タンポポ』『マルサの女』に黒沢がしゃにむに援護の筆を執っていたこと、そして前作に「平山教授」として出演した伊丹が黒沢を気に入ったということの方が不思議に思える。精神のバランスを急ピッチで崩してゆく黒田福美、下半身を焼き切られてなおも這って助けを求める古舘伊知郎、逆光の中でシルエットとして登場するウェスタンハット姿の伊丹など、本物の怪物に負けず劣らず化け物じみてる登場人物の姿や、燃え盛る炎の中で宮本とNOKKOが手を差しのべ合う場面のうちに、黒沢はそれでも懸命に顔を覗かせている。

### 「奴らは今夜もやってきた」(88年オムニバス映画『危ない話』第2話)

脚本：及川中、黒沢清／撮影：瓜生敏彦／出演：石橋蓮司、嵯峨周平、洞口依子ほか

真っ黒なトラックに棲まう虚無僧姿の二人の旅芸人が、大切な土偶を壊された恨みからか故なき憎悪か、作家の園田(石橋蓮司)を執拗に追いまわす。闇に溶け込む黒い装束や、実物より大きく映る影を活用した怪物の造形には、前作でSFX丸出しの派手な怪物を作らされた際の怨念が滲んでいるかもしれない。本作の怪物には徹底して顔がなく、声もなく、恐怖に喚きたてる男を自らシーツと黙らせるほどだ。脱衣籠の底から現れる血まみれの鶏冠や、脚に巻きついた鎖をじゃらじゃらと鳴らしながら歩く怪物たちの重苦しい足どりも怖い。随所にからくり仕掛けを施した家で園田自身が淹れる、墨汁のようにどす黒いコーヒーが怖い。とはいえ、洞口依子が不思議な節回しで歌うように方言を喋り、加藤賢崇が引きつった口笛を奏でる蕎麦屋の場面、そして怪物たちが肌身離さず携えているカセットプレーヤーによって、本作はいまだ『ドレミファ』に連なっている。

### 『地獄の警備員』(91年)

脚本：富岡邦彦、黒沢清／撮影：根岸憲一／出演：久野真紀子、松重豊、長谷川初範ほか

人の命を守るはずの警備員が、逆に人を襲ってきたら……。そのワンアイデアで押し通す、単純明快な怪奇映画。富士丸という名の邪悪な「元相撲取り」(松重豊)が精神病院を抜け出したという情報は、開巻早々ヒロインの秋子(久野真紀子)が地獄のビルを初めて訪れるタクシーの中で知らされるし、むやみに背の高い新入りの警備員が、かの富士丸であることもすぐに判明するのだから、世にも恐ろしいこの事件にほとんど謎は介在しない。問うことができるとすればせいぜい、なぜ富士丸はヒロインのイヤリングに執着するのか、そしてなぜ人々を殺戮するのかということだけだ。「それを理解するには勇気があるぞ」という富士丸の言葉は、「なぜと問うてはいけない」という『ドレミファ』の平山教授の教えを、暴力によって刻みつけるものであった。常人とは

異なる「絶望的な時間」が流れているという彼の身体が、中に隠れた女もろともロッカーを叩き潰すとき、見えないものの脅威という初期黒沢映画の主題を目の当たりにする思いがする。

### 『<sup>ヤクザ</sup>893タクシー』(94年、ビデオ映画)

脚本：釜田千秋、黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：豊原功補、森崎めぐみ、大森嘉之、寺島進、芦屋小雁ほか

幼なじみが経営する零細タクシー会社を倒産から救うため、ヤクザの親分(上田耕一)が子分たち(豊原功補ら)を運転手として送り込む。羽振りは悪いが義理人情に篤い昔気質のヤクザ一家と、金に目の眩んだヤクザ上がりの新興金融業者という、古典的なヤクザ映画の図式を律儀に踏襲した設定に、初のヤクザものを手がける黒沢の気負いが覗えて微笑ましい。ほのぼのした人情譚の中で、悪徳金融と通じる悪徳刑事(諏訪太郎)だけがとことん邪悪で、前作の構図を反復しているとも言える。流れ去る車窓の風景などには無頓着に人々がひしめき合う狭苦しいタクシーの車内は、のちに『CURE / キュア』の空飛ぶバスへと発展することになる。

### 『<sup>ジャン</sup>打鐘——男たちの激情』(94年、ビデオ映画)

脚本：西村孝史、黒沢清(原作：山本康人『打鐘』)／撮影：喜久村徳章／出演：中倉健太郎、西村和彦、大杉連ほか

「先攻一本」でのし上がるハングリーな天才競輪選手ワタル(西村和彦)と、財閥の御曹司でもある「競輪界のプリンス」(中倉健太郎)との宿命の対決が、これが本当に黒沢映画かとわが目を疑うほど劇的に、かつ経済的に語られる。競輪用語についての生硬な説明台詞、新聞の見出しのモニターージュによる状況説明に驚かされるが、スローモーションをこれでもかとはばかりに多用したレース場面や、セピアがかった色に転調する回想場面を目にするに至って、黒沢が本作を、古典的な物語映画の定石を一通り走破する習作と位置づけているらしいと判る。とはいえそんな窮屈な世界でもやはり黒沢印を刻まずにはおれないというように、ワタルは唐突に自転車もろともゴミ捨て場に突っ込むのである。

### 『花子さん』(94年、テレビ作品／ビデオ『リアリスティック・ホラー学校の怪談I』第1話)

脚本：黒沢清／撮影：久保久雄／出演：本田智一、車和也、池乃めだかほか

男子中学生の3人組が花子さんの存在を確かめるといふオーソドックスな短篇。花子さん呼び出しのためには、「理科室を4回廻って、夕方5時55分に3階トイレの奥から2番目のトイレのドアを13回ノックする」という厳格なお作法が用意される。だが、それが正確に遂行されなかった1回目のトライでもなぜか花子さんは隣のトイレに潜んでい、ついには平然とトイレの外に出て延々と人を襲ってくるのだから、花子さんはもはやトイレというスイートホームを離れて、黒沢的な霊にふさわしい偏在性を獲得している。

『勝手にしやがれ!! 強奪計画』(95年)

脚本：赤井国泰、黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、七瀬なつみほか

『勝手にしやがれ!! 脱出計画』(95年)

脚本：黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、木内あきら、梶原聡ほか

『勝手にしやがれ!! 黄金計画』(95年)

脚本：黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、藤谷美紀、天本英世ほか

『勝手にしやがれ!! 逆転計画』(95年)

脚本：塩田明彦、黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、仁藤優子ほか

『勝手にしやがれ!! 成金計画』(96年)

脚本：じんのひろあき、黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、鈴木早智子ほか

『勝手にしやがれ!! 英雄計画』(96年)

脚本：大久保智康／撮影：喜久村徳章／出演：哀川翔、前田耕陽、黒谷友香、藤田敏八ほか

雄次（哀川翔）と耕作（前田耕陽）は、由美子（洞口依子）の斡旋で雑用を引き受ける、しがない便利屋稼業。おもちゃ箱のような雄次の家と、由美子が事務所に使う「先生」（大杉漣）の喫茶店を主な舞台とし、4人のレギュラーに毎回ヒロインを迎えて、全6作のシリーズが1年余りの短期間に立て続けに製作された。耕作が「雄さん!」と叫びながら慌てふためいて駆けつけ、雄次を自転車の後ろに乗せて河原を疾走するというオープニングは、さまざまな変奏をほどこされつつ全作に現われるが、強奪／脱出、黄金／逆転、成金／英雄という対になる2作ではそれぞれ同一シーンの別テイクが使われていて、わずかな違いを探す楽しみがおまけについてくる。さらに2人がごく真剣に輪唱するエンドロールの「森のくまさん」の歌が、オープニングともども全体のラフなつくりに見事なフレームを与えている。

第1作「強奪計画」の涼子（七瀬なつみ）が保母として勤めていた「あおぞら幼稚園」は2作目以降、なぜか荒れ果てた姿になって雄次と耕作の住処となる。無数のおもちゃと耕作の手料理が溢れ、ひっきりなしに誰かが訪れるこの開放的な空間は、外の世界に憧れる二人の確固たる足場となり、「脱出計画」ではオーストラリア、「黄金計画」では温泉、「逆転計画」ではハワイとアラスカ、「成金計画」では沖縄がユートピアとしてさかんに言及される。「あおぞら保育園」「あおぞら託児所」と微妙に名が変わり、内装も変わるが、雄次と耕作という愛すべき二人の記憶を積み重ねる場として私たちが何の疑いも持たずに信頼していたこの場所は、しかし最終作の「英雄計画」で、雄次も耕作もない真正正銘の廃墟と化す。これほどに能天気な、永遠に続くかと思われたシリーズの最後で、不条理にも雄次と耕作の死に出会わされた私は、せめて彼らの最期にふさわしく、浅薄でかさついた感傷に浸る。

『DOOR III』(96年)

脚本：小中千昭／撮影：芋野昇／出演：田中美奈子、中沢昭泰、真弓倫子ほか

保険外交員という職業柄、他人の会社に侵入することを常とする女（田中美

奈子)が、「愛」の言葉を振りかざす妖しいフェロモン男(中沢昭泰)の毒牙にかかり、接吻を通じて男に、そして謎の寄生虫に侵入される。奇主の繁殖を促すため、異性を惹き付けるフェロモンを発散させ、同性を撃退する攻撃性を与えるという寄生虫は、フェロモン男のみならず、彼に寄生虫を移されてゾンビ化した女たちの集団まで生み出すのだが、この常軌を逸した筋の通り具合が素晴らしい。ゾンビたちはひと気のない夜道にも白昼の交差点にも、ビルのオフィスにも隔てなく現れ、誰の目にも見えるし人が振り向いても消えることはない。こちら側と向こう側を隔てる存在としての「DOOR」を主題にしたこのシリーズにあってすら(黒沢作品はこの1作のみ)両者が地続きになってしまうあたりは、「トイレの花子さん」から繋がる中期黒沢映画の核心であり、怪物を退治した者がその怪物を継承してしまうという衝撃的なラストシーンは、のちの『CURE』にも繋がってゆく。

### 『復讐 運命の訪問者』(96年)

脚本：高橋洋／撮影：柴主高秀／出演：哀川翔、大沢逸美、清水大敬、六平直政ほか

家族全員が惨殺される中、押入れに隠れていてただ一人だけ情けをかけられた少年は、成長して安城刑事(哀川翔)になった。知りすぎた安城は現在の唯一の家族である妻をも殺される。一味の者さえ「あいつら普通じゃねえ」と言うほど凶悪な殺し屋三兄妹は、出所者の更生に尽くすはずの保護司の職を表看板に掲げていて、『地獄の警備員』的な逆転の発想がここにも活かされている。かつて少年の命を救うという過ちを犯した兄(清水大敬)は、かつての少年と相似形を描きながら押入れの中で銃弾を浴び、より凶悪な弟(六平直政)は、互いが互いの鏡像を演じるかのような銃撃戦の末、現在の安城と相似形を描きながら砂浜に倒れる。過去の家族と現在の家族、どちらについても完全な復讐を果たした安城は、一人生き残って浜辺で写真を焼く。本作が黒沢との初コンビとなる高橋洋の脚本は、『神田川淫乱戦争』どころではない近親相姦の醜えた臭いを三兄妹に漂わせ、黒沢はこれに対抗してかヒーローたるべき安城にまで怪物めいた冷酷さを与えている。

### 『復讐 消えない傷痕』(96年)

脚本：黒沢清／撮影：柴主高秀／出演：哀川翔、菅田俊、小林千香子ほか

安城(哀川翔)は闇資金ルートの捜査に深入りすぎて妻を殺された元刑事。前作と直接のつながりはない。安城はもはや、警察組織の巨大データベースを駆使して敵を割り出す刑事ではなく、膨大なゴミの中から行き当たりばつたりに情報を拾い上げるゴミ処理場の屑拾いである。これまでの作品では暴走する者を堰き止める存在として頻出していたゴミ捨て場が、本作ではゴミ処理場に巨大化して、胸の奥底に怨恨をくすぶらせる安城にしばしの逗留を許す。今にも死にそうな寝たきり老人を葬ったところで彼の復讐が完遂されるわけではない。崩壊寸前の組を率いながら安城と差す将棋の時間だけが安息のようだった吉岡(菅田俊)が死ぬと、彼が生前ユートピアとして思い描いていた「朝比奈

温泉」へと一人車を走らせる。極端なロングショットで捉えられた海上で、運動会のピストルのような乾いた銃声とともに行なわれる冒頭の麻薬強奪劇といい、車の振動をそのままカメラに伝えながらオープンカーに乗ったヤクザたちを延々追いつづける長廻しといい、この映画にしか通用しない時間の流れを確実に存在させている稀有な傑作である。

### 『CURE / キュア』(97年)

脚本：黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：役所広司、萩原聖人、うじきつよしほか

昨今の和製ホラーブームに先鞭を付けた完璧なサイコ・スリラー。医学部崩れで記憶喪失の青年、間宮（萩原聖人）は、「あんたの話が聞きたい」とひたすら聞き役に回って人々を癒しながら、人の心の奥底に慎ましく潜む憎悪を密かに招き寄せ、次々に殺人を教唆する。催眠暗示はライターの明滅や水の滴りが刻む一定のリズムを凝視させることでなされ、暗示されるのもまた人の喉元をX字に切り裂くという具体的な行為で、物語のすべては映画の視覚性と不可分な形で緊密に構築されている。間宮を追い詰める刑事の高部（役所広司）は、間宮に対する烈しい憎悪を募らせながらも、精神を病む妻（中川安奈）との生活の苦悩を吐露してしまい、その身体は、抗いようもなく間宮の身体を模倣しはじめる。ただ二人きりの廃墟で高部が間宮を撃ち殺すことさえ、間宮の身体の究極の私有化、永遠化と映る。「一度くらい、すべての細部が完璧に物語に奉仕するような映画を撮ってみたい」と常々口にしていた黒沢にとって、紛れもなく一つの到達点である。

### 『廃校綺談』(97年、テレビ作品／ビデオ『学校の怪談 f』第3話)

脚本：大久保智康、黒沢清／撮影：喜久村徳章／出演：大澤健人、車宗洸、諏訪太郎ほか

廃校まで秒読み段階の中学校で起こる出来事を日付とともに綴ったドキュメンタリー的な構成で、それぞれのエピソードは解釈されないまま、ぶっきらぼうに羅列される。白昼堂々現われて、暴力教師をも怯えさせる長い黒髪の少女は確かに恐ろしいが、そうしたお決まりのイメージ以上に、存在の基盤を失った生徒たちが日に日にアナーキーになり、亡霊との境をなくしてゆくさまが秀逸。学校とともに消えてなくなる「学校の怪談」そのものに対する荘厳な葬送曲である。

### 『蛇の道』(97年、ビデオ『修羅の極道 蛇の道』)

脚本：高橋洋／撮影：田村正毅／出演：哀川翔、香川照之、柳ユウレイほか

酷いやり方で娘を殺され怒りに燃える宮下（香川照之）が、犯人と思しき3人の男たちを次々に拉致監禁し、拷問の限りを尽くす。黒沢映画初登場の香川照之は橋田寿賀子ドラマのイメージを払拭し、正気と狂気の境目をアクロバティックに行き来する傑出した演技を見せつける。さまざまな拷問の中でも、がらんとしたガレージに置かれた一台のモニターが延々映しつづける、殺された少女の在りし日の笑顔が何にも勝る暴力となる。数学教師の新島（哀川翔）

はごく親切に宮下の復讐に手を貸すのだが、二人の間に存在する黒い絆が次第に浮かび上がる。同じ高橋洋脚本のせいか、『復讐 運命の訪問者』では杖をついて緩慢に歩を進めていた無口な女が、本作では杖を仕込み杖に持ち替え、口以上に雄弁な手話を操る蠶唾の「コメットさん」となって再登場している。

#### 『蜘蛛の瞳』（97年、ビデオ『修羅の狼 蜘蛛の瞳』）

脚本：西山洋一、黒沢清／撮影：田村正毅／出演：哀川翔、ダンカン、大杉漣、菅田俊ほか  
冒頭で早々に「復讐」を果たしてしまった新島（哀川翔）が、目的を見失って送る無為の日々。『復讐 消えない傷痕』のドライブや将棋の場面ばかりを綴り合わせるように時間は流れる。旧友の岩松（ダンカン）に出会い、流されるまま殺し屋稼業に引き込まれ、「一度終わったものにこそ価値がある」と説く化石掘りの組長（菅田俊）に見込まれて、ついには岩松殺しを命じられる。無表情な男たちによる寒い会話、海辺で男たちが一列に並んでぼんやり佇む釣りの場面、フリスビーをこちらへ投げると見せかけて他所へ投げるギャグなど、北野武のイメージを確信犯的になぞっているようにも見えるが、ダンカンを準主演に迎えることで不可避免的に生み落とされた畸形的な作品と言える。実は復讐が完遂されていなかったと判るラストシーンは、ここに至る80分がすべて夢だったというように北野臭と訣別し、車椅子上の寺島進は静謐な美しさを湛えている。

#### 『ニンゲン合格』（98年）

脚本：黒沢清／撮影：林淳一郎／出演：西島秀俊、役所広司、菅田俊、リリィ、哀川翔ほか  
交通事故で10年間の昏睡状態に陥り、ふと目覚めると中学生から突如25歳になっていた豊（西島秀俊）。その間に一家は離散していた。彼は客などほとんど来ない釣堀を経営する父の友人、藤森（役所広司）のもとに身を寄せながら、かつて存在した（と彼が信じる）ポニー牧場を再生させ、離れ離れになった家族をひとりひとり呼び寄せる。彼に10年間の空白を与えた加害者の運転手（大杉漣）が、真の被害者は自分だとチェーンソーを振り回し、家族の再生の象徴のようなポニー牧場を破砕する場面は、淡々としたホームドラマに突如紛れ込む怪奇映画の片鱗であり、突然烈しくゴミを踏み散らしたりする豊自身の凶暴性とともに、「何にも似ていない映画になってしまった」と黒沢自身が評する本作の奇妙なバランスを決定づけている。

#### 『木霊』（98年、テレビ作品／ビデオ『学校の怪談G』）

脚本：高橋洋（原作：網野成保）／撮影：柴主高秀／出演：山口美沙、金井愛砂美、菅原かおりほか

靈感の強い少女が、校内のどこに隠れたかを当てるという形で級友たちからテストを受ける。校内の地図を凝視する少女の目の前で、黒いホコリとして視覚化された禍々しい存在が標的の人間めがけてするすると動き、平面上で起こったことはそのまま現実にもリンクして、次々と殺戮が行なわれる。それは



霊能力を信じてもらえないことをおのれの存在の否定として捉えた多感な少女による過剰な復讐であったのだが、それにしてもこのホコリは、黒い影による黒沢的な霊表象の実にポップなアレンジと覚えてかわいらしい。

### 『カリスマ』(99年)

脚本：黒沢清／撮影：林淳一郎／出演：役所広司、風吹ジュン、池内博之、大杉漣ほか

周囲に毒素を分泌し、森全体を枯らしてしまう「カリスマ」という木を前にして、人は一本の木と森全体のいずれを生かすべきか——。外界から隔絶された「森」を舞台に、はぐれ刑事、植物学者の姉とその妹、ファシストめいた「カリスマ」護り、金になる木に目が眩んだプラントハンターなどがそれぞれの思惑にうごめく哲学巨篇。「世界の法則を回復せよ」という使命を、死にゆく犯罪者から与えられて森に迷い込み、それぞれの考えを聞いて回る羽目になった藪池刑事（役所広司）は、「カリスマ」が焼き払われた後、何の変哲もないただの木を「カリスマ」として護り始める。彼はただの木を「カリスマ」に仕立てあげる力を得、つまりは自ら「カリスマ」となって「森」を後にするのだ。『DOOR Ⅲ』『CURE』に連なる「怪物襲名」ものである。

### 『大いなる幻影』(99年)

脚本：黒沢清／撮影：柴主高秀／出演：武田真治、唯野未歩子、安井豊、松本正道ほか

2005年、謎の花粉が舞い散る閑散とした街で、今にも消えてしまいそうなおのれの存在の不確かさに怯える恋人たち。ミチ（唯野未歩子）は海外向けの郵便物を気まぐれにくすねて自宅へ持ち帰り、ハル（武田真治）は友人とともに退屈な電子音楽を制作している。二人は生殖能力を失わせる副作用を知らずながら、ためらわず花粉症の薬を飲み、防塵マスクに身を固めて歩を速める周囲の人々を尻目に、つまらなそうにボール遊びに興じる。結婚という制度や生殖の生産性に結びつくことのない即自的な愛を追求する、黒沢流の恋愛青春映画である。映画美術学校が生徒の実習を兼ねて制作したもので、アジア系女性とその情夫との派手な喧嘩、部屋の模様替え、遠い国から岸辺に流れ着いた兵士の死体、ブラジル音楽集団とファシスト集団の対決など、自主映画のように撮られたさまざまなシーンがさしたる脈絡もなく淡々と綴り合わされている。

### 『降霊』(99年、テレビ作品／ビデオ)

脚本：大石哲也、黒沢清（原作：マーク・マクシェーン『雨の午後の降霊術』）／撮影：柴主高秀／出演：役所広司、風吹ジュン、草薙剛、石田ひかりほか

誘拐されて森を逃げ惑う少女が森に大きな箱を見つけ、咄嗟に中に隠れる。棺桶のようなその箱は、森の音を録りに来ていたテレビ番組のミキサー（役所広司）のものであり、彼はそうとは知らず少女を自宅に連れ帰ってしまう。霊感が強く、刺激のない日常に倦んでいた妻（風吹ジュン）が、この偶然を活かして一旗揚げの方途に考えをめぐらすうち、あっけなく少女は死ぬ。生きている少女と死後の少女の間には、まるで隔てが設けられておらず、見えるか見え

ないかはどこまでも見る者の——夫、妻、そして私の側に帰される。夫婦は辛抱強い会話によって知覚を共有し、同じものを見ようとするのだが、オープン・エアの明るいカフェで、「人ごみの中にいれば大丈夫」と安心してくつろぐ妻の首にすると巻きつく少女の手のことを、夫は妻に言うことができない。互いにいたわりあっていればこそ共有できない事柄に、夫はひとりじっと耐える。お祓いに訪れる神主に、やや肥り過ぎたVシネの帝王、哀川翔を使うとは、黒沢のキャスティングもついにここまで来たかと感嘆するが、田んぼの中でなされる役所と哀川の問答は、黒沢映画における役所的リアリズムと哀川の軽薄さとの対決のようでもあった。

### 『回路』(00年)

脚本：黒沢清／撮影：林淳一郎／出演：加藤晴彦、麻生久美子、小雪、役所広司、武田真治ほか

インターネット上の謎のサイト、携帯電話、赤い粘着テープで封印された「あかずの間」……。それらが開く異界への回路を通じて、若者たちが一人また一人と消えてゆく。世界が壊れてゆく。ただそれだけの物語。したがって映画はことの次第を辿るよりも、死に至るある「システム」を映画のうちに実在させることにもっぱら力を注ぐ。投身自殺や無人の銀座や爆撃機の墜落を実現するためにふんだんに用いられたというCG処理が、あるいは銀残しの技法によってフィルムを覆うことになった陰りの層が、この「システム」によって駆動するひとつの世界をヴィスタサイズの画面のうちに凝縮する。歪み、軋むショットの数々と同様、映画自体があまりの緊張に歪み、軋んでいる。内なるものが画面の外へと溢れ出す極限的な瞬間に118分間留まりつづけた奇蹟の映画である。

〔黒沢監督作品にはこのほか、73年の「六甲」をはじめとする数多くの8ミリ作品（「SCHOOL DAYS」78年、「しがらみ学園」80年、「逃走前夜」82年など）や、テレビ作品（「もだえ苦しむ活字中毒者・地獄の味噌蔵」90年、「よろこびの渦巻」92年、「ワタナベ」93年など）がある。〕

『SIGHT』VOL.5, AUTUMN 2000（ロッキング・オン発行）より加筆転載

☆本書中の黒沢清監督作品の制作年は、『映画はおそろしい』（黒沢清、青土社、2001年）に準拠した。（編集部）

## 本誌写真掲載作品 ビデオ・DVD情報

(p.13)

『勝手にしやがれ!! 黄金計画』

ビデオ発売：ケイエスエス

(レンタルのみ)

(p.39)

『CURE／キュア』

DVD発売：大映株式会社

4,700円(税抜き)

(p.69)

『カリスマ』

ビデオ・DVD発売：日活／キングレコード／東京テアトル

販売：キングレコード株式会社

(p.85)

『ドレミファ娘の血は騒ぐ』

ビデオ発売・販売：J.V.D.